

渋沢 健氏

健氏



1961年神奈川県生まれ。83年テキサス大卒。87年UCLA
大学経営大学院修了。以後JPMorgan銀行、ゴールドマン・サ
ックス証券、米大手ヘッジファンドなどを経て2001年投資コ
ンサルティイングのシブサワ・アンド・カンパニーを設立、代表取
締役に就任。経済同友会幹事、渋沢栄一記念財団理事も務める。

近代日本経済の礎を築いた渋沢栄一の孫に、戦時中
日本銀行総裁を務め、終戦時には大蔵大臣にも就いた
渋沢敬三がいる。その敬三の弟、智雄が私の祖父であ
る。直系ではないが、私は栄一から数えて5代目の子
孫。その私が本書を著すきっかけとなったのは、富に
関する当時の栄一の卓見が少しも古びず、現在の日本
に通用すると考えたからである。

例えば、栄一は『論語と算盤』の中で「もしそれ富
豪も貧民も王道をもって立ち、王道すなわち人間行為
の常規であるという考えをもって世に処するならば、
百の法文、千の規制あるよりも遙かに勝った事と思
う」と記している。

栄一は終生、『論語』を人生の指針にしたが、孔子
の教えは宗教員がなく、プラグマティ
ック(実用主義的)でした。栄一もそ
うです。「自分たちの生き方をきちんと
とし、当たり前のことをあたり前に行

「資本で支配」より「信用で説得」

おつ」と脱ぎ続けた。それを栄一は王道と呼んだ。自
ら王道を歩み信用という資本を蓄積し、使った。資本
で支配するより信用で説得する。ある種、ベンチャー
キャピタルの理想です。

一方、栄一は農民の子だったが、徳川慶喜公の弟の
徳川昭武公に随行して万国博覧会開催中のパリに滞在
し、仰天している。当時、日本では卑しいと思われて
いた金貸し(銀行家)と軍人が対等に話をしている。
スエズ運河では運河造りに政府資金ではなく、民間の
ロスチャイルドが投資して事業を進めている。一
滴のお金をたくさん集めれば銀行という「大河」に
なる。大資本となり相当な事業ができる。そこに栄一
は魅力を感じた。

昭武公の随員は大勢いたのに、他の人はなぜ同じ魅
力を感じなかったのか。青春時代に高崎城の乗っ取り
を計画して幕府転覆を図ろうとした男が、パリに行っ
て「別に政府でもなくてもよい。民間の立場でも相当
なことができる。権力でなくとも、実力を持てばでき
る」と感じた。それが、後に500の会社を興す栄一
の気付きだった。

平成は豊かな時代だが、王道を歩まないと将来悔や
むかもしれない。王道を進めば日本は必ず躍進する。
素晴らしい言葉を残してくれた栄一おじいさんに感
謝したい。

著者が

語る

五叩

のくくえ
栄一を築く
渋沢栄一の
一人・富の
100の教え

巨人・渋沢栄一の

「富を築く100の教え」